

学級における「いじめ」の構築とジェンダー言説

—女子大学生による「振り返り」からの緒論—

森 繁 男

(教育学科)

1. はじめに

今日の「学校」および「ネット」の世界において、「いじめ」はますます不可視化し、かつ深刻化しているといわれている。そして、時に「いじめ自殺」なる悲惨なニュースが世間を震撼させ、人々は「あってはならない教育問題」として「学校の対応」をより強く求める。しかるに、責任を問われる「学校」側にも「いじめ」の実態や原因は正確に把握しきれていない。まさに今、「いじめ」は「鶴」の如き捉えどころのない「厄介な問題」となっている。

しかしながら、「いじめ」は現に起きているし、子どもたちは戦々恐々たる日々を過ごしている。そこには大人たちやメディアには感知し得ない「現実感覚」があるはずである。ただし、そうした「いじめについての当事者性」(reality)は、これを「厄介な問題」として「根絶しよう」とする教育世間の「いじめ言説」(discourse)との相互作用の過程で「子どもたち自身の解釈枠組」(interpretative framework)として自ら了解されてゆく。そこには「構築されたいじめの現実」を見て取ることができよう。

さらに、いじめにおける「不可視性」をより色濃く有しているときされる「女子のいじめ」においては、ここに「ジェンダー言説」が紛れ込むことによってますますその「現実性」が強められ、「女子特有のいじめ」として解されてゆくのである。

本稿は、このような「いじめの解釈言説」に注目し、さらにそれが「女子の当事者性」とどのように結び合って「女子におけるいじめの現実」とされるのか、といった問題意識を出発点

とする。その上で、ここではまずその手始めに「いじめを考える教育番組」(録画教材)と「視聴後の女子大学生の振り返り」(感想メモ)を材料として、「言説にもとづく『いじめの現実』構築過程」の一端を探ることにしたい。

2. 「いじめ」の問題化と「根絶」言説

わが国において、いわゆる「いじめ」が「問題化」したのは、伊藤茂樹氏によれば1979年9月に埼玉県上福岡市で起きた中1男子の「自殺」からであろう^{註1)}。しかしながら、この時点では未だ「いじめ」という名詞はメディアに現われていない。新聞報道に「いじめ」として報じられたのは1984年11月に大阪市で発生した高1男子2名による「仕返し殺人」からであるとされる。続く1985年1月に水戸市中で中2女子が自殺した事件報道にも「いじめ」という見出し語が付けられている。これらの「いじめ」は「学校における」「陰湿・残忍な行為群」を指す言葉として用い始められたのであって、「いじめめる」という動詞の指す行為の一部を特化したものと考えられる。ここに「いじめ」というカテゴリーがメディアの中で成立し、以降、人々は「学校」の中に「いじめ」を「発見」しようとすることになる^{註2)}。そのようなプロセスは次第に「ドメイン拡張」(言葉の指す領域の拡大解釈)を伴いながら「いじめの小さな芽は、やがて死に至る結末をもたらす」といった「言説」(人々に自明化された命題表現)を構築してゆく。すなわち「いじめ」は「死と隣り合わせ」の行為として「根絶されなければならない」教育問題になっていったのである。

ところで、かような言説は「現象」の「内包」を集めて成立したものであるというよりは「外延」を種々の現象にあてはめようとするものであるがゆえに、人々の「まなざし」として「曖昧化」し「脱文脈化」してゆく^{注3)}。つまり、見ようによっては「いじめ」は至るところにその「芽」を紡いでいるのであり、そう見れば「不可視性」は克服されて結果的に「根絶」へと「教育的な」大運動が始まることは想像に難くない。

こうして構築された「根絶言説」は、各学校における「いじめ対策プロジェクト」やメディアに見られる「いじめ撲滅キャンペーン」となって「現実」と化してゆき、児童・生徒たちにも「あってはならない」という総論的・否定的な（しかしこれは「人権論的に正しい」）観念だけが塗り立てられてゆくことになる。そうなれば、「どうしても起きてしまういじめ」の発生根源に向けられるべき「まなざし」は意識的・無意識的に閉ざされてしまいかねない。

3. ジェンダーの視点と「隠れたカリキュラム」

さてここで、いったん「ジェンダー」に目を転じよう^{注4)}。

社会学でいう「文化」とはある集団や社会に共有されている価値・規範・行動様式のことであるが、「女であること」や「男であること」に関するそれらのことからは「メス」「オス」といった生物・生理的性差（sex）からは直接には導かれないもので満ち満ちている。たとえば男女を色彩で識別するときにも今でもよく用いられる「女＝ピンク」「男＝ブルー」といった指標の類がそれである。これまでの多くの文化人類学的研究や女性学的研究が示してきたのはこのような「性別」が歴史的・社会的に「つくられてきたものである」という証拠と認識に他ならない。これが「ジェンダー」（gender＝社会・文化的な性）といわれるものである。

われわれは既に「近代的個人」として存在しているはずであるが、他方では「近代的性別分業」という今日まで維持されてきた社会構造か

ら完全には自由ではない。したがって、われわれがいかにか「個人」として生きようとしても、そこには性別二分法的な「社会化」（socialization＝ある集団や社会に共有されている価値・規範・行動様式を身につけることによってそのメンバーとなってゆく過程）を避けがたい。これを「ジェンダー化」と呼んでいる。

こうしたジェンダー化に伴って「オス・メス」というsexカテゴリーから「男・女」というgenderカテゴリーに向けて社会化されてゆく間に性別分業から生じている男女間の権力関係も自明化され正当化されてしまう。また、ジェンダー化された男女の相補的セクシュアリティは日常を非日常化する牽引関係（恋愛関係）の中にジェンダーや権力の非対称性（不平等）を見えなくしてしまう。

このようなジェンダー化は、さらに教育過程の中にある「隠れたカリキュラム」（hidden curriculum＝表に出にくい暗黙の教育プログラム）によって、それ自身（＝ジェンダー化自体）が見えにくいものになってしまう。すなわち、「ジェンダー言説」（＝自明化されたジェンダー認識）についての受容的な社会化が進行してゆくのである。

ところで、「文化」はそこに含まれる個別の認識内容、すなわち「意味」の総体として成立している。たとえば「我が家の家風」や「本校の校風」などがそれであり、そこには「食事の作法」「父親の地位」「進学の実績」「クラブの強さ」などの「個別の現象」が詰め込まれている。その「意味」はさらに分析的には「知識」「価値」「規範」の三層に分かれており、その一部は「身体化」されてもいる。たとえばいわゆる「性的欲求」も、生物学的欲求に基礎付けられてはいるものの、その対象や表現方法は共有された「意味」（meaning）を知ることによって初めて具体的に感知されるのであって、決して「動物的本能」そのものではない。われわれがその性的欲求を満たすべく行為を遂行しようとするとき、意識するかしないかはともかく、すべからく「性」に関する「知識」「価値」「規範」を潜り抜けているのである。

逆にいえば、このような「意味」はそれが「社会的行為」を可能にするものである限りにおいて、他者との「相互作用」(interaction)を通じて形成され獲得されてきたものである。そして個々の「意味」は他の事物のそれと整合されながら「意味秩序」を「構築」(construction)し、それがさらに一定の拡がりをもち得たときに「文化」(culture)が形成されるのである。そしてそのような文化がある時間的持続を経過することによって「制度」(institution)に結実する。近代社会の国民国家におけるそのミニマム・コンセンサスこそが「法」と呼ばれる「明文化された制度」なのである。したがってこの「制度」には、理念の部分においても現実の部分においてもそれまでの「相互作用」の過程であらわれてきた人と人との相互のカテゴリゼーションや力関係が内包されており、いわゆる「社会構造」(social structure)を規定する「しくみ」が配列されている。

以上のようなプロセスを経て成立している「制度」はわれわれの社会生活を安定的に遂行させるための必要条件であるとともに、裏を返せばわれわれを認識の根本から「拘束」しているものでもある。日本人（あるいは東アジア人）にとって「米」は「主たる食材」以外の何物でもないと同様に、近代人にとっての「恋愛」は「一対の未婚の男女の間にみられる性愛」以外の意味をもつことを（少なくとも「常識」としては）許されないのである。しかしそれらは多くの社会構成員に「共有されている」という事実（あるいはそのような「思い込み」）によって正当化され「自明のもの」という「至高性」が与えられている。疑う余地のない「あたりまえ」のことなのである。

4. ジェンダー言説としての「いじめ」

上述のように「ジェンダー」および「ジェンダー化」をとらえた上で話を戻し、「いじめ」を（文科省的定義とは別に）「学校およびその延長上のメディアにおける陰湿・残忍ないやがらせ行為」と定義しておこう。しかしながら、そこには「学校生活の見えないプログラム」と

しての「ジェンダーの隠れたカリキュラム」が影を落としてくる。それは「いじめの実態」と「いじめの解釈」の間で繰り返される「言説実践」として児童・生徒の認識に「現実感」をもたらす^{注5)}。

では、その「実態」に「男女差」はあるのだろうか。ここで扱う「いじめ」は、今日深刻な問題と化している「ネットいじめ」の前段階（＝2000年代）に見られるようになった「学級における権力ゲームとしてのいじめ」である。すなわち、1980年代からのいじめ研究は森田洋司氏らの「四層構造論」（学級集団論）を経て社会的に進展し、2000年代には「学級二分論」とでもいうべき「権力解釈論」へと発展していった。それは「学級社会」の「現実」が「役割」から「権力」へと遷移していったことと期を一にしている。（このことは今日に至って「学校カースト」という「見えないけれども、誰もが知っている現実」にも繋がってゆく。）

ここで一つのデータを見ておこう。これは2008年に大阪樟蔭女子大学の石川義之氏が大阪府下の公立中学校2校の中1～中3生徒446名から得た質問紙調査の結果である^{注6)}。この中で「いやがらせ被害経験」として明らかかな（＝統計的に有意な）「男女差」が認められるのは「冷やかしかからかい、悪口を言われた」（男子43.3%＜女子56.7%）、「たたかれたり、けられたりした」（男子70.1%＞女子29.9%）「仲間はずれや集団で無視をされた」（男子25.9%＜女子74.1%）、「お金をとられたり、持って来いと言われた」（男子83.3%＞女子16.7%）である。これを見る限り、男子には「身体的・物理的被害」が多く、一方女子には「視線的・関係的被害」が多い、といった傾向がある。このことからすぐに「男女のジェンダー・ステレオタイプ」を描くことには無理があろうが、女子のほうが（いわゆる）「陰湿で不可視な人間関係的被害」に遭っていることは確かである。

このあたりについて、片岡洋子氏は次のように述べている^{注7)}。

「女性は攻撃性を示さない」という「伝統

的な見方」とは、女性は攻撃的であってはならないというジェンダー規範に他ならない。女性が男性とくらべて身体的暴力という見えやすい攻撃性を示さない傾向にあるのは、能力や好ましさの評価の基準が、男性は身体的強さにおかれ、女性は他者から頼られたり好かれることにおかれるなど、ジェンダーがいじめの態様の違いに反映しているのではないだろうか。身体的暴力が男性に身体的強さにおける優劣をつけるとすれば、人から好かれるか否かという評価基準におかれている女子にとって、仲間はずしや無視、悪口は、「嫌われている」ということを被害者に思い知らせることでダメージを与える。

すなわち、データで見た「いじめ被害の男女差」は「男女の本質的な違い」というより「性に応じた社会的評価基準の違い」からくるものであり、「どないじめをするか」は「どこに社会的評価基準があるか」ということの裏返し現象なのである。これは一種の「ジェンダーの隠れたカリキュラム」といえるものであろう。換言すれば、「いじめの男女差」は「ジェンダー言説」と決して無関係ではない、ということである。とりわけ、「女子のいじめ」が「陰湿で不可視」とされるのは、「人間関係の維持／断絶」に焦点づけられたものにならざるを得ないからなのである。

5. テレビ番組の視聴と「振り返り」

では、当の「女子」たちは、この「いじめとジェンダー」の関係についてどのように捉えているのだろうか。

筆者は、本年度（2014年度）前期の担当授業「教育病理論」（本学発達教育学部教育学科専門選択科目／主たる受講生は教育学専攻3回生）において、2007年にNHK（総合テレビ）で放映された「中学生日記：なぜいじめの？」を教育目的で録画したDVDを視聴させ、放映当時に登場人物（いじめた女子・いじめられた女子）と同じ年代（中学2年生前後）であった受講生たちに当時の「振り返り」をさせてみた。

（DVD視聴の途中で当時の世相や流行に言及したり、受講生の身に起こったできごとなどを聞いて回ったりして、リアリティの回復に努めた。）そして、2回にわたるドラマ（放映は3回だったが、「第2回」に初回のまとめがあったので、授業時間の関係上、2回の視聴をさせた）視聴後に「当時の自分と重ね合わせて、ドラマの中の『いじめ』について思うところを自由に書きなさい」との指示を与え、時間内提出で30分の記述時間を取った。

ドラマのあらすじは次のようなものであった。

ある中学校2年生のクラスで深刻な「女子のいじめ」が起こった。これは「友だちグループ」への参加と離脱を巡るものであった。Aはそのグループの一員だったが、あるきっかけから「グループをやめるかBをいじめるか」の選択をリーダー格のCから迫られ、悩んだ挙句、もともと仲の良かったBをいじめるに至る、といったものである。いわゆる「仲間外れ」であるが、それを実行する生徒自身が「仲間外れ」に恐れおののきながら不承不承に手を染める、といったところに「女子の友だち地獄」というようなストーリーが展開される。いわば「仲間外れにされないための仲間外れ」であり「いじめられないためのいじめ」である。

このドラマは、いわゆる「センセーショナルリズム」よりは「リアリズム」に徹しており、全国の視聴者からも「声」を拾って最終回の「演じた子たちによるディスカッション」で締め括られた。

さて、本学の受講生らは2007年当時にちょうどドラマの登場人物たちと同年代であり、「リアリティの共鳴」が予測された。次に、彼女らの書いた「感想」の中から「ジェンダー言説」を自明化していると思えるような記述を拾ってみたい。

「私が小・中学生の頃は表面的には目立った

いじめは見られませんでした。陰で悪口を言ったり、無視したりといった陰湿なものがありました。私も友達と一緒にいじめグループに加わってしまったことがあります。仲のいい子だったので、そのいじめが悪いことだという罪悪感を感じていなかったです。」

「いじめは、関係のない人にもどんどん広まって、いつのまにか自分の居場所がどこにもなくなります。」

「クラスの女子グループにも身分がある。中学校では特に、勉強の出来などは関係なく、ただただ気の強い子、わいわい系のグループがトップになり、おとなしめの優しい子たちは下の身分というような雰囲気がある。女子グループにもランクがある。だから、やはり自分は身分が上でありたいものだから、一緒にいじめて上の身分の子とつながっているのだと思う。」

6. おわりに

前節で見てきたものは全提出者（30名）の記述の中で典型的な事例である。他の受講生も、多かれ少なかれ、このような「振り返り」を書き連ねている。要するに、「中学生女子のいじめ」には「仲の良さからいじめに加わる」「そのいじめはどんどん広がる」「そこに気の強さによる力関係が形成される」というメカニズムがみられる。

これらのことは一見「普通のできごと」のようにも感じられるが、男子の場合にはほとんどみられないパターンである。しかも、それを「男子との違い」として認識している記述は皆

無に等しい。つまり、彼女らにとって、こうした「いじめ」は自明なのであろう。

本稿で取り上げた視点は「いじめとジェンダー」研究のほんの取っ掛かりに過ぎない。しかしながら、ともすれば「学級やメディアの特性といじめ」の分析視点に欠落しがちな「ジェンダーの視点」を追加することは、ますます「陰湿化・不可視化」してゆく事態の解明に一定のヒントを与えてくれる可能性がある。そうした研究の持続的・実証的な発展が待たれるところである。

注

- 注1) 伊藤茂樹「『いじめは根絶されなければならない』—全否定の呪縛とカタルシス」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか—教育を語ることばのしくみとはたらき—』新曜社、1997年、207-231頁。
- 注2) 同上論文、209-213頁。
- 注3) 同上論文、213-216頁。
- 注4) 森 繁男「多様な個性を育てる教育の社会的課題—階層とジェンダーにみる格差の克服—」村田翼夫・上田 学編著『現代日本の教育課題—21世紀の方向性を探る—』東信堂、2013年、147-170頁。
- 注5) 北澤 毅「フィクションとしての『いじめ問題』」伊藤茂樹編著『いじめ・不登校』（広田照幸監修：リーディングス—日本の教育と社会—⑧）日本図書センター、2007年、161-172頁。
- 注6) 石川義之「いじめ被害の実態—大阪府公立中学校生徒を対象にした意識・実態調査から—」『大阪樟蔭女子大学 人間科学紀要』9、2010年、155-184頁。
- 注7) 片岡洋子「女子のいじめと人間関係」『教育』No.733、国土社、2007年、56-63頁。